

～体験型復興・防災教育プログラムの検討～

平成27年地域政策研究センター(教員提案型・前期) 採択課題

課題名：持続的かつ戦略的な減災・復興教育プログラムの構築
 研究代表者：総合政策学部 教授 伊藤英之
 課題提案者：岩手町立川口中学校
 研究メンバー：吉川肇子(慶應義塾大学 教授)、鎌田政好(岩手町立川口中学校)
 技術キーワード：復興教育、防災学習、顔の見える地域づくり

表1 被災地体験プログラムの概要

実施日時	プログラム内容
2015/8/10	<ul style="list-style-type: none"> 集合、オリエンテーション、移動 田老防潮堤見学、学ぶ防災 津波避難体験、移動、解散
2015/8/11	<ul style="list-style-type: none"> 壁紙作成、移動、解散

▼研究の概要(背景・目標)

東日本大震災以降、防災教育のニーズが顕在化している。しかしながら、学校教育現場では、防災教育を担当できる教諭の不足やカリキュラム上の制約等により、外部講師を呼んで単発的な学習で終わってしまう場合がほとんどである。さらに、求められる防災教育の内容も高度化しており、単なる知識・技能の修得から、防災意識の育成へと変化が求められている。我々は、持続的かつ効果的な防災教育プログラムの構築を目的として、岩手町立川口中学校全学年を対象とした土砂災害減災教育に取り組んでいる。今年度は、レギュラーで継続している防災学習内容に加え、沿岸被災地において、被災地見学や炊き出し等を体験させ、より具体的な災害イメージを涵養するとともに、被災時の行動について考察させ、その効果を観察した。



図1 避難体験の様子



図2 災害弱者誘導体験



図3 壁新聞作成



図4 炊き出し体験

▼研究の内容(方法・経過)

東日本大震災以降、被災地学習が増加しているが、これらの学習では、語り部等による「経験談の共有」あるいは「見学」だけの受動的な学習になりがちである。本研究では、中学生自ら「体験」し、被災時のイメージを涵養することに重点を置いてプログラムを検討した。表1に当日のプログラムスケジュールを示す。

▼研究の成果(結論・考察)

川口中学校における一連の取り組みを通し、生徒の防災への関心が向上し、生徒の感想文では「学区内の土砂災害危険箇所を意識して通学するようになった」など、生徒の意識そのものに変化が認められている。

川口防災新聞

リーダー研修会を通して考えたこと

<p>防潮堤・たろう観光ホテル・津波プレート・津波記念碑を見学して考えたこと</p> <p>津波は、田老ホテルまで、7秒で到達しています。 海本大期</p> <p>津波は、防潮堤が壊れてしまっても約7秒で津波が押し寄せ、命を奪う恐れがあります。 鎌田政好</p> <p>津波は、津波が来た瞬間から、自分の足で逃げなければなりません。 吉川肇子</p>	<p>津波のDVDを見学して考えたこと</p> <p>津波は、津波が来た瞬間から、自分の足で逃げなければなりません。 吉川肇子</p> <p>津波は、津波が来た瞬間から、自分の足で逃げなければなりません。 吉川肇子</p>	<p>避難体験をして考えたこと</p> <p>避難するときは、自分の足で逃げなければなりません。 吉川肇子</p> <p>避難するときは、自分の足で逃げなければなりません。 吉川肇子</p>
<p>研修会を通して考えた自分たちが川口地区でできること</p> <ul style="list-style-type: none"> ○避難所の場所・距離が書いてあるポスターを作る 菊池友宗 ○ガスや、停電になったときに非常食を用意しておく 海本大期 ○ラジオを用意しておく 田村俊太郎 ○お年寄りの方にも声をかけて、できるだけ一緒に避難する 海本大期 ○音鈴から、指示や放送などをしっかり聞く力をつける 田村俊太郎 ○地域の人や家族とで、災害時の避難場所を確認しておく 岩崎友宗 	<p>リーダー研修会の一押しポイント【一番楽しかったこと】</p> <p>野外炊事</p> <p>【一番印象に残ったこと】</p> <p>津波のDVD</p> <p>【一番大変だったこと】</p> <p>新聞作成</p>	

図5 中学生が作成した壁新聞(1班)